

令和7年度「学生ボランティア団体活動レポート」優秀レポート一覧

【優秀レポート】20件

(応募順)

番号	大学名	ボランティア 団体名	タ イ ト ル	活動分野
1	福井大学	放課後教室 Together	「居場所×学び」で子どもたちの選択肢を広げる＊	福祉
2	関西大学	児童文化研究サークル 「あかとんぼ」	子どもの「また来てね」を未来へ ～人形劇・紙芝居でつなぐ50年の実践～＊	福祉 地域連携(交流)
3	金沢工業大学	学生教育支援団体 こてっと	不登校児童生徒へ向けたオンライン上の公園での成果	福祉 地域連携(交流)
4	健康科学大学	トレーナークラブ	ありがとうの力が未来を変える —トレーナークラブの社会貢献と学び—	地域連携(交流) 被災地支援
5	中央大学	中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チーム防災	防災啓発の在り方を考える	地域連携(交流) その他(防災啓発)
6	上智大学	上智大学学生主体NGO「めぐこ」 ～アジアの子どもたちの自立を支える会～	「顔の見える支援」が生む豊かな人間性＊	国際交流(途上国 支援)
7	滋賀医科大学	若者にHPVワクチンについて広く発信する会 Vcan	「知らないまま後悔しないで」 —学生が届けるHPVワクチン啓発活動—	福祉 その他(教育)
8	立命館アジア太平洋大学	学生 NGO PRENGO	学生NGO PRENGO活動レポート 2025	地域連携(交流) 国際交流(途上国 支援)
9	摂南大学	摂南大学ボランティア・スタッフズ	ボランティアの第一歩～地域と共に成長する～	地域連携(交流)
10	東京外国語大学	学生NGO ALPHA	未熟でも挑戦できる場から、社会を変える力へ	国際交流(途上国 支援)
11	宮城大学	霜山研究室 災害ボランティアチーム	令和6年能登半島地震被災地における コミュニティ構築のための支援活動	被災地支援
12	明星大学	明星大学きらぼ学生サポーター	活動からの学びと今後の展望	福祉 環境 地域連携(交流)
13	沖縄キリスト教学院大学	沖縄キリスト教学院大学学生サークル Ladybird	「生理について」話せる”社会へ —Ladybirdが描く未来—」＊	その他(生理の貧 困)
14	京都大学	さいもんめ	大学生の自由な発想でつくる「居場所」	福祉
15	龍谷大学	のとコネクト	能登半島復興支援への関り —今の私たちにできること—	地域連携(交流) 被災地支援
16	豊橋技術科学大学	豊橋日曜学校	知的障がい児と学生ボランティアがともに育つ場 —日学の「第三の居場所」と活動の意義—＊	福祉
17	関西大学	関西大学イノベーション創生センター支援団体 NPO法人日本サステナブルイノベーターズ	ファッションを通じて患者さんを笑顔に！＊	環境 その他(医療)
18	国際医療福祉大学	国際医療福祉大学 国道461号ラベンダーロード計画	大田原市民をラベンダーの香りと景観で癒したい	環境 地域連携(交流)
19	東洋大学	能登復興支援団体 「NOTO×TOYO青いビブス」	能登半島の「そうぞう」的復興のために	被災地支援
20	関西学院大学	関西学院大学災害コミュニティつむぎ	つながりで支える防災 —災害時、社会と学生をつなぐハブとして—	被災地支援 その他(防災啓発)

＊を付したものは特に優秀なレポート(以下にレポートを掲載)

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	福井大学
団 体 名	放課後教室 Together

タイトル：「居場所×学び」で子どもたちの選択肢を広げる

1. 活動の目的・趣旨

私たち放課後教室 Together は、「居場所×学び」をコンセプトに学習支援教室を開催しているボランティア団体です。この教室を通じて子どもたちにとっての「家でも学校でもない第3の居場所」を創ることを目的としています。子どもたちにとっての「居場所」は、家庭や学校、地域をはじめとして、近年ではインターネット空間までに及び多岐にわたります。そして、居場所の数が多いほど、自己肯定感や将来への希望を感じる子どもの数が多くなり、さらにチャレンジ精神や困難を乗り越える力が育まれることも示されています（子ども・若者インデックスボード ver4.0／子ども家庭庁）。活動を継続していく中で、現代の子どもたちが抱える問題は一樣ではなく、個別化していることを実感しました。経済的な困難だけでなく、学校や家庭に安心できる場所がない「心の貧困」を抱える子どもたちも決して少なくはありません。一見裕福に見えたとしても、その背後には複雑多岐な課題が潜んでいる場合もあります。そこで私たちは、まず安心できる「居場所」として新しい教室の形を創り、多様な学びを提供し、豊かな心を育むことを目指しています。そして、最終的には、子ども一人ひとりが抱える問題解決の一助となることを目標にして活動しています。

2. 活動の成果

活動開始時は、福井市内でのみの開催でしたが、2022年5月以降は永平寺町にも活動拠点を拡大しました。そして、参加者は増加を続け、これまでに通算300回以上の教室を開き、のべ2,500人を超える小・中・高校生が参加しています。このように、地域に根差した居場所づくりを実現し、心理的安全性の高いコミュニティで子どもたちの自己肯定感を育むことができました。

私たちの団体は大学生で構成されており、子どもたちにとって身近で相談しやすい存在になることができる点が強みです。活動を進める上では、子どもたちと対等な関係、傾聴と共感ができるオープンなスタンス、子どもたちの将来に責任を持つという3つの姿勢を重要視しています。比較的年齢の近い大学生が、学年や学校が異なる子どもたちの間に加わることで、安心感を生み、学校職員や保護者には話しにくい悩みや日常の雑談も気軽に共有してもらうことができました。これは、上記に述べた3つの姿勢が功を奏し、子どもたちとの対等な関係を築き上げること、かつ、子どもたちの心を開けることができたからだと考えています。また、教室には様々な学年の子どもたちが参加しており、異学年間の円滑なコミュニケーションを育む場ともなりました。ボードゲームなどを通して、子どもたちは自然に交流することができています。小・中・高校生という多感な時期における様々な人との関わりは、心理的・精神的発達を促すだけでなく、その後の人生にも大きく影響を与えるものです。実際に参加している子どもたちから、いろいろな人と遊ぶ楽しさを知ることができた、話を聞いてもらうことができて気持ちの整理ができるなどといった感想をいただいております。先に述べた「心の貧困」という問題を解決する一助となっているのではないかと思います。

また、普段の活動では学校の宿題を中心に受験勉強のサポートも行っています。大学受験を終えれば

かりの学生や塾講師で指導経験のあるメンバーが在籍しており、質の高い学習支援も可能となりました。

さらに、年 5 回程度ワークショップも開催しています。ワークショップは、ディスカッションやライフプランニング、SDGs など多様なテーマを軸にしています。ゲームを交えながら学ぶ形式を取り入れることで、学校や家庭では得ることが難しい知識や進路への視野を広げる機会を提供することができました。ワークショップの一部には、地域の NPO や行政と連携することで行ったものもあり、地元と一体となった子ども福祉に貢献することができました。さらに、福井大学内だけでなく、大学外のボランティアサークルとともにワークショップを開催することで、大学と地域の子どものつなぐハブの役割も果たすことができました。

3. 抱えている課題・将来への展望

現在私たちが抱えている課題は 3 点あります。

1 点目はメンバーの拡充です。所属しているメンバーの多くは福井大学医学部生であり、その特性を活かして「医学博士になろう！」といった医学関連のワークショップを実施することができました。その一方で、今後は福井大学他キャンパスや他大学からの参加者を増やし、より多様性のあるコミュニティを目指したいと考えています。これにより、子どもたちに多角的な視点を提供できるようになり、自分の将来への可能性を考える契機を増やすことに繋がると考えています。

2 点目は地域への貢献活動の強化です。子どもたちに寄り添った課題の解決のためには、子どもたちからの情報収集だけでは足りません。加えて、地域の特性に沿った対応も必要であると考えています。これまでに私たちは地域のボランティア活動にも参加してきました。今後は私たちが主催するイベント以外にも、地域行事により一層積極的に関わり、多くの子どもや保護者に私たちの活動を知っていただきたいと考えています。

3 点目は新たな形での居場所構築です。参加希望者の中には様々な事情で外出が難しい子どもたちもいます。今後はオンライン参加の仕組みを整備する、2024 年から福井子ども家庭センターと協働で実施している「メタバース相談会」を活用するなど、新たな形での居場所づくりを進めていきたいです。

最後に、私たちの将来の展望について述べます。実際に活動を行っている中で、私たちは多くの子どもたちの笑顔に触れています。その笑顔に触れるたびに、私たちが築き上げてきた居場所の重要性を感じるとともに、居場所を維持していく必要があるという責任を強く感じています。3つの姿勢のうちの 1 つである「子どもたちの将来に責任をもつ」は、私たちがこの団体を持続していくことに他ならないのではないかと考えています。さらに、子どもたちの保護者の方から教育相談などを受ける場合もあり、保護者の方が「相談できる居場所」になりつつもあります。それだけでなく、メンバーの大学生も子どもたちからエネルギーをもらっており、私たちの生活に鮮やかな色をつけてくれています。私たちは設立以来、子どもたちのための居場所を創り続けてきました。そして、この居場所はいつの間にか子どもたちのみならず保護者さらには、私たち大学生にとっての居場所にもなりつつあると感じています。さらに、上述の通り、私たちは医学部生が主体であることから、将来的には福井の小児精神医療や教育問題の解決、そしてその体制構築に寄与できるのではないかと考えています。また、大学生がボランティアに参加し子どもの課題に向き合う時間をもつことがきっかけとなり、大学生自身が地域の教育問題などに目を向けるだけでなく、知恵を絞り合って解決策を生み出すことで地域活動に貢献できるのではないかと考えています。

これからも、福井の子どもたちの「今」と「未来」をより豊かにすることに貢献し、地域全体を盛り上げる役割を担っていきます。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	関西大学
団 体 名	児童文化研究サークル「あかとんぼ」

タイトル：子どもの「また来てね」を未来へ ～人形劇・紙芝居でつなぐ 50 年の実践～

第 1 章 団体概要と活動の意義

関西大学公認の児童文化研究サークル「あかとんぼ」は 1975 年に創立し、「すべては子どもたちの笑顔のために」を合言葉に、2025 年で 50 周年を迎えた。公園での紙芝居や人形劇から始まった活動は、地域の学校・学童への訪問へと広がり、現在は年間 19 の学童施設と継続的につながっている。ボランティア学生は子どもにとって“たまたま出会った大人”かもしれないが、その偶然の出会いが温かい記憶となり、未来を支える力になると信じている。

主な活動は、吹田市内の留守家庭児童育成室（学童保育）を中心とした定期訪問で、人形劇・紙芝居・あそびの提供と交流である。併せて、地域イベントや子ども食堂への参加、「おばけまつり」「アウトドアクッキング」「段ボール工作」「だるまさんがころんだ大会」など、多彩な催しを児童館やコミュニティと協力して実施してきた。これらは子どもたちの①非認知能力（協調性・創造力）の育成、②異年齢交流による社会性の涵養、③地域と大学の接点形成という 3 点で教育的効果を生んでいる、また、家庭や学校だけでは届きにくい「身近な大学生の手づくり文化体験」を継続して届ける点に、私たちの独自性がある。学内でも、新入生向けの活動紹介・交流会、ボランティアフェスティバル、学園祭での発表を通じて、学生同士のつながりを広げてきた。とりわけ 2024 年の 50 周年祝賀会は、地域・大学・卒業生が一体となる場となり、「あかとんぼ」の歩みを次世代へ引き継ぐ節目になった。

第 2 章 これまでの活動でできたこと

（1）継続訪問による信頼形成：ボランティア受入団体や学校の先生方と日程・演目を調整し、節分や七夕など季節行事に合わせた演目や工作を用意する。活動後は「また来てね」「次はいつ？」といった声をいただき、安心して待ってもらえる良好な関係性を築けている。

（2）手づくり文化の更新：紙芝居における台本・演出・大道具・人形の新作制作、既存作品の改稿・修繕を学生主体で実施している。軽量化・耐久性・安全性の観点で材料を選び、舞台転換も改善して狭い教室でも高い没入感を実現している。

（3）大学内外への波及：新入生歓迎行事・学園祭での発信や地域から依頼のあるイベント・公演を重ね、活動の可視化が進んだ。大学生の社会参画意識を喚起するとともに、地域からのリピート依頼が増加している。

第 3 章 これまでの活動の課題

第一に、制作・運搬コストの不足である。代々手づくりで受け継いだ道具を大切に使っているが、新しい企画や大型イベントに必要な資材費、大学から学童・依頼先へ移動する交通費が慢性的に不足し、演目の質・安全性・回数のいずれかを抑制せざるを得ない時がある。

第二に、作品の安全・耐久性の確保である。小学生低学年が至近距離で鑑賞する場面が多いため、角の面取り、塗料の安全性、可動部の補強、防災・不燃素材の導入など、基準の更新に継続投資が必要だが、資金面の制約で徹底が難しい。

第三に、訪問頻度・体制の安定化である。学業優先のため定期試験期は活動が縮小し、80 名近い在籍でも全員が子どもと直接関われない。必要備品を増やせば活動期に複数拠点で同時に活動でき、機会を増やし稼働率を高められる。

第四に、効果の可視化である。アンケート・観劇後ワーク・先生へのヒアリングを整え、子どもの変化や学びを定量・定性で示す仕組みを確立できれば、活動の魅力を分かりやすく伝え、次の機会の獲得にもつながる。

第4章 活動を通じて得られたこと

子どもたちにとっては、家族や学校の先生とは異なる第三者への信頼感が育ち、人形劇の物語を理解し感情を想像する力や、登場人物を自分たちなりに発展させて新たな遊びを創る力が育まれている。「また来てね」と声をかけてくれること、再訪時に顔を覚えてくれていることは、私たち学生にとって大きな励みであり、同時に子どもたちの社会性や協調性を学ぶ機会にもなっている。

地域にとっては、大学と地域をつなぐ存在としての私たちの役割が浸透し、「身近な大学生の手づくり文化体験」を提供することで、大学の力を地域に還元できた。

学生にとっては、脚本から大道具等の制作、演出、当日の進行、安全管理、記録までを担う過程で、企画力・表現力・合意形成・リスク管理・発信力といった実践的な力が養われ、将来に生きる学びとなっている。

第5章 活動を通じてなお不足している点

強みである手づくりの積み重ねと信頼関係を維持しつつも、現場では次の不足を感じる。

①制作・修繕費の不足により、資材調達や修繕が後回しになり、耐久・安全・可搬性に影響が出る場合がある。②交通費の不足で、遠方や同時期複数拠点への訪問に踏み切りづらく、訪問頻度や公演回数に変動がある。③マイクやスピーカーなどの音響機材を所持していないため、特に屋外での公演時には、後方の座席まで音声を届けられない。④未経験者の参加のハードルがあり、公演セットや役割が限られると、初めて参加する学生が見学や運搬といった活動に偏り、演じる・制作する機会まで届かないことがある。⑤成果の可視化が弱く、公演後のワークやボランティア受入団体や小学校の先生方へのヒアリングの定型化・蓄積が不十分で、改善や外部への活動説明に活かし切れていない。

第6章 今後の役割・展望

これまでの土台を崩さず、上記の不足を小さく確実に埋めていくことが等身大の役割である。助成をいただければ、①材料費や備品の充当により、人形の関節・芯材の更新、紙芝居枠や背景の補強、防災・不燃素材や角処理の徹底など、消耗が早い部分から計画的に整え、訪問先の小学校によって教室や多目的室など環境差があっても、子どもたちにとっての「見やすさ・聞きやすさ・安全さ」を安定して提供できる。②交通費の補助により、少人数でも活動できる編成で巡回を継続し、遠方や依頼公演にも無理なく応じやすくなる。「また来てね」という声に、できるだけ切れ目なく応えられる。③簡易的な音響設備の導入により、屋外でも安定して声を届けることが可能になり、観客全体に物語の世界をしっかりと届けられるようになる。④初めてのメンバーが関わりやすい体制として、準備・操作・公演の手順を簡潔にまとめ、先輩とペアで小さな場面から担当できるようにする。上演セットをもう一式整備できれば、練習や小規模訪問の機会が増え、早期から「演じる側」を経験できる。⑤“次につながる”簡易な振り返りとして、子ども向けの一言ワークと先生向けの短時間メモを標準化し、情報収集→学生間で共有→小さな改善の流れを日常化する。

第7章 結論

私たちは、紙芝居をめくり、人形を動かし、子どもと笑う小さな一歩を重ねてきた。その積み重ねが50年続き、地域に根付いた。ボランティアに必要なのは特別な才能ではなく、「誰かの笑顔を見たい」という気持ちである。助成により「制作物の質と安全性の向上」「訪問頻度や機会の増加」が叶えば、これまでの作品とともに、学期ごとに発達段階に合わせた新たな連作（例：四季の物語、安全・防災を学ぶ人形劇）を制作し、安定して届けることで、次年度には新入生が制作を引き継ぐ循環を強められる。

創立50年で培った手づくり文化の知恵を次の50年へ。より多くの子どもたちの「また来てね」の笑顔を大切に、これからも子どもたちと地域のために活動が続けていきたい。そして、まだボランティア活動をしたことがない方々にも「一緒に笑顔をつくる仲間」になっていただきたい。

「すべては子どもたちの笑顔のために」この想いを胸に、私たちは次の50年、そして100年へと歩みを進めていく。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	上智大学
団 体 名	上智大学学生主体 NGO「めぐこ」～アジアの子どもたちの自立を支える会～

タイトル：「顔の見える支援」が生む豊かな人間性

「顔の見える支援」とは何か。「めぐこ」～アジアの子ども達の自立を支える会」は 50 年間、この問いと向き合ってきた。1975 年に設立された当団体は、インド及びフィリピンの初等教育を支援する学生主体 NGO として上智大学で活動する中、国際支援という活動から生まれる多くの人のつながりを実感してきた。

「めぐこ」の起源は、上智大学故アンセルモ・マタイス教授と有志の学生によるインド訪問に遡る。ヨーロッパ移動合宿の帰路でインドを訪れた際、一行は現地の教育施設の子ども達を取り巻く貧困の厳しさと格差の現実には衝撃を受けた。同じ「人間仲間」として、同じアジアにおいて初等教育を受けることが困難な子供達の未来を支えたいと望んだ一行は、1975 年 10 月に「めぐこ」を創立した。その後も、インドとフィリピンとで隔年に開催する「スタディーツアー」は、支援金を届けるだけでなく、現地での暮らしを肌で感じ、子どもたちと触れ合う重要な機会として引き継がれた。現地との絶えないつながりは、「めぐこ」独自の支援の形を追求する上で不可欠なものである。

前述の通り、「顔の見える支援」「同じ人間仲間」「ライフスタイルの再考」の理念を柱とし、「めぐこ」は学生を主体として活動してきた。大学最寄り駅での街頭募金を始め、バザーへの出展、自動口座振替システムを利用した募金、さらにはチャリティーコンサートを通して、継続的な募金活動が行われてきた。近年の支援の特徴として、「めぐこ」の SMS 制度が挙げられる。当団体が集めた支援金は教育施設全体ではなく、施設及び「めぐこ」によって指定された奨学生に対して、初等教育を受ける間の継続的な支援に充てられる。「初等教育の支援を遠方の国の学生が支援することは、金銭面はもちろん、子どもたちにとって「誰かが学びを応援してくれている」との自信と希望につながる。」現地の施設からもこのような言葉をいただき、教育に向けた環境整備が不十分な地域とのつながりの大切さを日々実感している。また、報告書やニュースレターを通して、日本の支援者に現地の子どもの様子や現地の社会問題について共有し続けられる点も、団体の活動の成果であると言える。

そうした「めぐこ」の特色である「顔の見える支援」の中核となる活動が、スタディーツアーである。スタディーツアーとは、「めぐこ」が支援している施設を部員自ら訪問し、施設の現状や子どもたちの様子を把握した上で、今後の支援の在り方を検討することを目的とした活動である。実際に部員が現地を訪れることで、日本にいただけでは分からない支援先や子どもたちが抱える問題に向き合い、解決策を模索することができる。そして、部員が現地で見つけた課題を部員同士で話し合い、柔軟に支援の仕方を変更できるという点も、学生主体団体ならではの利点であると感じている。

さらに、「顔の見える支援」を一層強めているのが、クリスマスの時期に定期的に行われてきたチャリティーコンサートである。企画から実行までに多くの労力を要する本イベント企画することは、「めぐこ」にとって募金活動が単に受動的に資金を募るだけでなく、部員自らが能動的に支援金を調達し、活動を支援者や学内外の皆様を紹介する機会であることを示している。昨年度に実施した 2024

年度のチャリティーコンサートは、「めぐこ」50周年記念であると同時に、コロナ禍以降初めての開催という点で特別な意味を持つイベントとなった。学外事業者からのスポンサー支援を募ったり、インド・フィリピンの支援施設に関する掲示物を作成したりする過程を通じて、部員がより主体的に活動に参加できたように感じる。何より、普段は国際支援と関わりを持たない方に、現地で感じた思いや部員の熱意を「コンサート」という一つの空間を通して伝えることも、支援者と「めぐこ」の間での「顔の見える」関係である。

以上のように、等団体では「顔の見える支援」を実現するための、多様なアクションを実現することができた。しかし、支援先及び当団体を取り巻く社会情勢が創立当初とは大きく異なる中、「めぐこ」は現在いくつかの問題を抱えている。例として、隔年で開催してきたスタディーツアーを、昨年度は志願者が最低実施人数に達せず中止となってしまったことが挙げられる。その要因として、国内における物価高騰を背景に、多くの部員にとって高額の渡航費を支払うことが困難となったことが考えられる。これを受け、現地訪問に代わる手段として、「顔の見える支援」を実現すべくオンラインでのスタディーツアーを実施し、フィリピンの支援先と ZOOM を通して現状確認を行った。今後は渡航に向けた支援金を団体として支給できることが望ましく、得られた支援金を全て現地に送金することが義務となっている当団体において、外部団体からの協賛や補助が重要となると考えられる。

また、現地において求められる支援が、必ずしも現在の支援形態において実現できていない点も、今後の「めぐこ」が向き合うべき重要な課題である。例として、インドにおいては当団体が認定した奨学生だけでなく、彼らが所属する教育施設や寮全体への補助金として使用されている現状がある。これらの施設においては、「めぐこ」が本来想定する初等教育の学費や教育関連費だけでなく、寮の食料や設備に用いられることもある。2023年度のスタディーツアーにおいて判明した通り、現地では初等教育の受け入れ体制や金銭的補助が以前よりも充実している一方、家庭環境の悪化を背景に中退するいわゆる「ドロップアウト」が問題となっており、寮の存在が重要なものとなっている。また、フィリピンの支援施設の一部からは、初等教育を終えた後の専門学校での学びも、生徒のキャリアを形成する上で極めて重要なものであり、これに対する支援が今後は望ましいとの声が挙がっている。このように、現在での支援では生徒の生活やキャリアを包括的に援助することは難しく、今後の奨学金制度のあり方を再構築する段階にあると言える。

以上を踏まえ、「めぐこ」にとっての顔の見える支援とは、金銭援助を超えた「人と人」とのつながりそのものであり、物理的な距離のある子どもたちと関わる上で必要とされる責任感でもある。「めぐこ」の支援により、初等教育施設を卒業後、高等教育を受けることができた子どもたちの存在は、活動により得ることができた喜ばしい成果である。さらに、笑顔とパワーに溢れる子どもたちとの交流は、彼らが直面する困難な現実を自分ごととして捉えるだけでなく、純粋な力を与えてくれるものである。これは、「めぐこ」での活動あってこそ得られた経験である。他方で、現地との認識の差や距離によるコミュニケーションの困難は常に直面してきた課題であり、常に最も必要な場所に、必要な支援を届けられたと断言できない。しかし、「募金」が身近な活動となった現代において、その支援が誰のために行われていて、どのような人の未来を支えているかを認識されないまま、ただお金のやり取りが行われることも少なくない。国境や立場を超えたつながりの大切さを知っている「めぐこ」が、今後も教育支援を続けることには、「ボランティア」そして「支援」の中で生まれる豊かな人間性を発信し続ける上で、意義のあるものではないか。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	沖縄キリスト教学院大学
団 体 名	学生サークル Ladybird

タイトル：「生理について”話せる”社会へーLadybird が描く未来ー」

私たち学生サークル・Lady Bird は、2021 年、大学のゼミ活動の一環として設立されました。設立当時の学生たちは、授業を通してさまざまな社会問題を学ぶ中で、これまで話題にしづらく、どこかタブー視されてきた「生理」に目を向けました。生理は一部の人だけの問題ではなく、性別を問わず理解し合うべき大切なテーマです。しかし現実には、偏見や無関心、そして無知による誤解が今も根強く残っています。

ゼミから生まれたこの活動には、「生理を特別なものではなく、自然なこととして語れる社会をつくりたい」「性別にとらわれずお互いを理解し合えるジェンダーレスな社会を実現したい」という思いが込められていました。その強い思いが、先輩から後輩へとバトンのように受け継がれ、今日まで Lady Bird の活動が続いています。私たち現メンバーも、初期の理念に共感しながら、それぞれの視点や経験を生かして新しい形の社会活動を広げています。この“世代を超えてつながる思い”こそが、学生団体ならではの大きな強みだと感じています。

Lady Bird の主な活動の一つが、小学生や中学生を対象にした「生理」をテーマとした出前授業です。生理は「恥ずかしいこと」「話してはいけないこと」とされがちですが、私たちはそのイメージを変えたいと考えています。授業では、生理を誰にとっても自然で身近なものとして捉え、性別に関係なく理解し合えるように工夫しています。

小学生向けの授業では、まず「生理とは何か」という基礎から丁寧に説明します。そのうえで、ナプキンの種類を紹介し、実際に触れてみる体験を取り入れています。さらに、赤い液体を使ってナプキンの吸収力を確かめる実験も行います。子どもたちは興味を持って参加し、「初めて知った」「姉にもっと優しくしようと思った」といった感想を話してくれます。こうした体験を通して、彼らにとって生理が「特別なことではない」という意識が芽生えていくのを感じます。

中学生向けの授業では、さらに踏み込み、「生理の貧困」という社会的な課題を取り上げます。私たちはこの問題を「経済的貧困」「知識的貧困」「教育的貧困」という三つの観点から説明します。生理用品を買うお金が足りないだけでなく、正しい知識がないことや、教育の機会がないこともまた“貧困”の一つであることを伝えます。生徒たちは真剣に耳を傾け、「男女で一緒に学ぶことが大切だと思った」「知識を持つことが思いやりにつながる」といった感想を寄せてくれます。

思春期の子どもたちに生理を教えるのは簡単ではありません。言葉の選び方や伝え方に細心の注意が必要です。しかし、授業後の素直な反応や真剣なまなざしを見ると、この活動の意義を強く感じます。これからも試行錯誤を重ねながら授業内容をより良くし、後輩たちへと引き継いでいきたいと考えています。

学内での活動にも力を入れています。その代表的な取り組みが、大学トイレへの無料ナプキン設置です。これは、出前授業でも取り上げている「経済的貧困」の現実を踏まえ、誰もが安心して学べる

環境を整えることを目的として始まりました。活動開始にあたり、50 名以上の学生から署名を集め、「突然生理が始まることもあるので助かる」「とても大切な取り組みだと思う」といった声をいただきました。現在は大学側の協力や支援金により維持されていますが、継続のための資金確保は依然として課題です。

この取り組みは単なる物資の提供ではなく、「生理を恥ずかしいものとせず、誰にでも起こる自然なこととして受け入れる社会をつくる」という Lady Bird の理念そのものです。また、2021 年には 5 月 28 日を「生理をジェンダーレスで考える日」と制定しました。これは、生理周期が平均 28 日でおおよそ 5 日間続くことに由来しており、「生理を性別を超えて考える社会をつくろう」という願いが込められています。

2024 年 7 月 14 日には、本学で「生理の日」イベントを開催しました。このイベントには子どもから大人まで幅広い世代が参加し、生理や命の大切さについて学び合う貴重な機会となりました。当日は、Lady Bird が小中学校で実施している「生理の貧困」に関する出前授業を再現し、生理用品の入手が困難な現状や、「生理の貧困」が経済的理由だけでなく、知識的・教育的側面とも密接に関わっていることを参加者と共に考えました。また、「いのちにエールを贈る会」から 2 名のゲストを招き、「いのち」と「生理」、そして「いのちの大切さ」をテーマにしたワークショップを実施。世代を超えた対話が生まれ、参加者からは「生理についてしっかり考えることができた」「いのちの話が心に残った」といった感想が寄せられました。

さらに、学外でも他団体との協働に積極的に取り組んでいます。今年 6 月には、沖縄県主催の「若者の性行動・性教育の現状に関するフォーラム」に、若者代表として登壇しました。リアルな声を伝える立場として、自分たちの経験や感じている課題を共有することで、性教育の在り方について考える貴重な機会となりました。この経験は、今後 Lady Bird がより広く社会へ働きかけるための大きな学びとなりました。

活動が続ける中で私が最も強く感じたのは、「声を上げることの大切さ」です。生理や性に関する話題は、今でも恥ずかしいもの、話してはいけないものとされがちです。しかし、授業やイベントを通して「初めて生理について話せた」「男性も知ることが大切だと感じた」という声を聞いたたびに、少しずつ社会の意識が変わっていることを実感します。伝える立場として責任を持ち、言葉を選び、チームで支え合う経験を通して、「知ること・伝えること」が人の理解や優しさを育むのだと学びました。

一方で、課題も少なくありません。特に資金面では、生理用品の購入費やイベント運営費の不足が続いており、活動を持続する難しさを痛感しています。また、メンバーも学生であるため、学業との両立やスケジュール調整が難しく、広報活動が思うように進まないこともあります。さらに、4 年生の卒業に伴うメンバー減少も課題です。それでも、私たちは限られた時間と資源の中で協力し合い、できることを一つずつ積み重ねてきました。課題があるからこそ、改善しようという意識が生まれ、活動の質を高める原動力になっていると感じています。

今後の Lady Bird は、学内にとどまらず地域社会全体へと活動を広げていきたいと考えています。現在は限られた学校でしか授業を実施できていませんが、将来的には沖縄県全体の小・中学校で授業を行えるような環境を整えることが目標です。そして、生理や性教育について語ることが「特別」ではなく「当たり前」になる社会を目指し、県内外の学生団体や地域団体と連携しながら発信の場を増

やしていきたいと考えています。また、SNS などのオンライン発信を通じて、より多くの人々に正しい知識と私たちの想いを届けることにも力を入れていきます。

ボランティア活動は、特別な才能や経験がなくても始められます。私自身も最初は「私にできるのだろうか」と不安を感じていましたが、仲間と話し合い、支え合いながら一歩を踏み出しました。その小さな一歩が、子どもたちの笑顔や安心につながっていくのを見て、「やってよかった」と心から思います。ボランティアを通して得られる出会いや学びは、何にも代えがたい人生の財産です。

Lady Bird の活動は、「生理」という身近でありながら語られにくいテーマを通して、社会に優しさと理解を広げる取り組みです。まだ課題は多く、道のりも長いですが、一歩ずつ着実に前へ進んでいると感じています。これからも、誰もが安心して学び、生きられる社会を目指して、活動を続けていきたいと思っています。そして、今回の助成金を通して、さらに多くの人に「知る」「考える」「話す」きっかけを届け、未来へとつながる活動へと発展させていきたいです。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	豊橋技術科学大学
団 体 名	豊橋日曜学校

タイトル：知的障がい児と学生ボランティアがともに育つ場-日学の「第三の居場所」と活動の意義-

はじめに

「豊橋日曜学校」(以下、日学)は、1973年に発足した、知的障がいをもつ子どもたちに学びと遊びの場を提供する学生主体のボランティア団体です。現在は、愛知大学、豊橋技術科学大学、豊橋創造大学の学生 62 名と、知的障がい児をもつ 14 家庭が共に活動を行っています。本団体では、月 2 回の活動を実施しており、「当日活動」では子どもたちとの 1 日を通じた交流(写真 1, 2, 3)を、「準備会」ではその活動の企画・改善(写真 4, 5, 6, 7)を行っています。また、新入生の勧誘や保護者への情報発信など、広報活動にも力を入れています。

活動を通して得たこと：子どもたちにとっての「第三の居場所」の提供

知的障がいのある子どもたちは日常生活の中で多くの壁に直面しています。集団行動が求められる学校生活や公共の場では、特性が理解されにくく孤立を経験することもあります。また、特別支援学校や福祉サービスでは、安全や療育を重視する一方、子どもが主体的に楽しみ、同世代と交流できる「自由な居場所」が不足しているという課題があります。加えて、施設や支援現場では人手が不足していることも多く、子ども一人ひとりに十分に関わることが難しい場合があります。

こうした社会的背景の中で、私たち日学は、知的障がい児にとって「家庭」や「学校」に次ぐ、安心して自分らしく人とつながれる「第三の居場所」となることを目指して、子どもたち一人ひとりの個性を尊重して活動しています。活動では、学生が一人の子どもを 1 年間継続して担当し、個性や特性を理解したうえで、その子に合った遊びや課題を個別に調整しています。言葉での意思疎通が難しい子や、突然行動が変わる子、ゲームのルールを理解することが難しい子など、多様な特性を持つ子どもたちが活動に参加しています。学生との信頼関係とゲームの難易度調整により、参加するすべての子どもたちが積極的に活動してくれるようになりました。中には、活動で作った工作物を家に持ち帰って繰り返し楽しむ子どもや「学生に会うため」に参加する子どもなどがおり、日学が子どもたちの生活の一部になっていることを実感しています。また、日学は子どもたちだけでなく、保護者にとっても大切な「第三の居場所」となっています。活動中は学生が子どもを見守ることで、保護者同士が安心して交流できる環境が整っています。年 2 回の意見交換会では、保護者と学生の間で率直な対話が交わされています。保護者からは、「普段は限られた環境でしか関わることができない子どもが、学生と友達のように接し、さまざまな人と出会い、別れを経験できるのが嬉しい」という声が寄せられています。日学が家庭や学校だけでは補いきれない役割を果たしていることを実感しています。

このように、日学は知的障がい児とその家庭にとっての「第三の居場所」として機能することで、子どもたちの安心や成長を支え、同時に保護者の孤立感や不安の軽減にもつながっています。学生も子ども達や保護者との関わりを通して、社会における自分たちの役割の大きさと活動意義を学びました。

子どもたちへの新たな挑戦の提供

2024 年度には、「新たな挑戦」の一環として、8 月に「三ヶ日青年の家」でキャンプを実施しました。普段の活動では体験できない、いかだ作りやピザ作りなどに取り組むことで、子どもたちの挑戦意欲や新たな可能性を引き出すことができました。(写真 8,9)

外に出て活動することで、学生の人数の多さが改めて重要であることを実感しました。普段は保護者だけでは行きづらい場所でも、多くの学生が子どもを見守ることで安全に活動でき、学生ボランティアの力が生かされる場であることを感じました。まだ安全面やサポート体制に課題は残りますが、子どもたちの笑顔や成長を通して、大きな成果を実感することができました。今後も今回の反省を踏まえ、子どもたちにより多くの挑戦の機会を提供していきたいと考えています。

学生ボランティアの限界とこれからの課題：受け入れられなかった子どもと向き合う

一方で、今年度の活動では「受け入れることができなかった子ども」の存在が、私たちに大きな課題を突きつけました。春に実施した体験会に、知的障がいと身体障がいの両方を持つ子どもが参加してくれました。私たちはその子にも日学に参加してほしいと願い、活動内容の調整を試みました。しかし、既存の活動は身体的自由がきかない子どもには不十分で、親御さんからも介助や安全面の課題を指摘されました。私たち学生は、介護や特別支援に関する専門知識や資格を持っていません。その限界を自覚し、「受け入れたい」という思いと「安全に活動できるか」という現実の間で、判断に苦しみました。最終的に受け入れを見送るという決断に至りましたが、学生のみで判断する難しさと学生ボランティアの限界を知る機会となりました。

この経験から今後は、障がいに関する正しい知識を学び、支援のあり方をより深く理解していく必要があると感じています。そこで、現在行っている学生間での講習会に加え(写真 10)、特別支援教育や福祉の専門家を招いた勉強会・講義の開催や親御さんとの意見交換会の活発化などを検討しています。また、同じように障がい児支援に取り組む地域のボランティア団体や福祉施設とのつながりを強め、情報を共有し合える関係づくりを目指したいと考えています。日学が地域ボランティアの情報をもち、橋渡しの役割を果たすことができれば、それもまた学生ボランティアとしての社会貢献の一つの形だと考えます。さらには、活動を通して感じた限界を社会に積極的に発信していくことで障がいに対する理解や支援のあり方について、社会全体で考える機会にしたいと考えています。

おわりに

今回の活動を通して、日学は知的障がい児とその家庭にとっての「第三の居場所」として必要であること、そして学生ボランティアの意義と限界を知る機会となりました。学生が知的障がい理解と関心を持って関わることは、保護者に安心感を与え、子どもたちにとって安全で自由な居場所づくりにつながります。また、活動を通して子どもたちから学ぶことは多く、学生自身の成長にもつながります。今後も、学生ならではの視点と豊富なアイデア力を活かしながら、子どもたちに新たな経験や挑戦の機会を提供し、保護者のサポートにも力を尽くしていきたいと考えています。さらに、活動で得た学びや課題を社会に発信することで、地域全体での支援のあり方を考える機会を作っていきたいと思います。

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	関西大学
団 体 名	関西大学イノベーション創生センター支援団体 NPO 法人日本サステナブルイノベーターズ

タイトル：ファッションを通じて患者さんを笑顔に！

異常気象が日常を脅かす現代、その背景には環境負荷で石油産業に次ぐアパレル産業の存在がある。このアパレル業界では、生産された衣類の約半分が売れ残り、使われずに焼却処分されている現状がある。CSR や SDGs などの言葉を一般的に耳にするようになった今日においても、ビジネスモデルとして廃棄することが常態化しているのである。さらに、SNS の流行により、服の流行サイクルはさらに早くなり、廃棄量は増える一途をたどっている。このままでは、地球環境はさらに悪化し、今後我々が住みにくくなるのは明確だ。しかし、これらの環境負荷を引き起こしているのは我々の購買行動でもあり、我々市民一人ひとりが当事者でもある。私達は市民の立場からこの課題に向き合い、市民公益活動（ボランティア）団体として解決を目指すべく活動を展開している。

本活動の原点は、アパレル廃棄問題に強い課題意識を抱いていた現副理事長の小川に、現理事長の西田が共感し、2023 年 1 月に課題解決に向け協働を開始したことにある。解決策を模索する中、コロナ禍で深刻化した別の社会問題に着目をし、廃棄予定の衣類を循環させることで、同時に解決を目指すのではないかと考えた。そこで私達が着目したのがコロナ禍による小児患者の孤立という問題だ。小児病棟では安心感や支えとなる人との関わりがコロナ禍により制限され、小児患者の精神的負担を増大させており、この問題は今もなお根強く残っている。当時高校生だった私達はこの状況を踏まえ、ファッションの力で患者を笑顔にすると同時にアパレル廃棄問題に貢献できるのではないかと考え、余剰在庫となった新品の衣類を小児患者に寄付をし、笑顔を届けるという仕組みを考案した。

しかし、この新品の余剰在庫を用いた衣類の寄付モデルは前例がなく、実現に至るまでには困難を極めた。まず、最初に産業廃棄物運搬許可・古物商許可などの法律・行政上の問題が懸念されたが、当時高校生ながら、弁護士・行政書士に加え、警視庁・環境省など掛け合い、リスクヘッジに努めた。その他にもアパレル企業のブランド保護や受け入れ病院での衛生上の問題なども懸念され、これらに対しても一つずつ対策を講じてきた。これらの地道な努力が、民間財団による助成金の獲得や支援者の協力を繋がり、2023 年 7 月太陽こども病院に初めての寄付を実現させた。寄付の際には多くの医療関係者から感謝の言葉をいただき、このモデルの需要を認識すると共にやりがいを感じられた貴重な機会となった。活動はその後、衣類を用いたワークショップの実施など内容を拡充させながら、東京女子医科大学病院や神奈川県立こども病院など大小公民様々な病院に寄付を行い、患者のウェルビーイングの面でも貢献してきた。継続的に活動が続ける中で新たな着眼点や寄付モデルが評価され「高校生ボランティアアワード 2023」にて上位 2 位にあたる鎌田賞の受賞、さらに東京都社会福祉協議会の主催する「ボランタリーフォーラム TOKYO」にて活動報告を行い、この活動を多く人の知ってもらおうと同時に、認知が低いアパレル廃棄問題の社会啓発にも取り組んできた。

活動 2 年目の 2024 年はメンバーの大学進学を機に活動を関西へ拡大することとなり、組織の大き

な変革期となった。関西ではゼロからの基盤構築が求められたが、メンバーの参画や協力先の開拓を進め、東京と同様の寄付体制を構築した。当初は協力病院の模索に苦労したものの、関西特有の地域的な繋がりに支えられ、兵庫県立こども病院、大阪発達総合療育センター、ドナルド・マクドナルド・ハウス神戸など病院に限らず、さまざまな施設で需要が広がり、寄付やイベントの実現をさせてきた。活動規模が大きくなる中、効率的な運営や組織化を目指し、関西大学イノベーション創生センターからの支援を受け、2025年6月「NPO 法人日本サステナブルイノベーターズ」を設立した。法人化と平行し「KANDAI×HOSEI SDGs アクションプランコンテスト 2024」での最優秀賞等の受賞などを契機に社会的評価が高まり学術分野との共働も増えた。

法人格の取得や学術連携を機に、私たちの活動は単なる衣類寄付に留まらず、社会全体への啓発活動へとその幅を広げている。2025年7月から8月にかけては大阪・関西万博へ出展し、アパレル廃棄問題の現状や私達の取り組みをブース展示やプレゼンテーションを通じて発信することで、国内外の多くの来場者に問題提起を行った。また、地域社会との連携を深めるべく、済生会吹田病院が主催する「済生会フェア」や地域のマルシェにも積極的に参加をしている。ここでは、衣類のアップサイクルを体験するワークショップなどを行い、市民の方々と直接対話をしながら楽しく社会問題について学べる場を設けている。これらの活動を通じて、私達はアパレル廃棄問題を市民一人ひとりが当事者として考えるきっかけを創出すると同時にエシカル消費を促すことを目指している。

これまでの活動を通して得られた最大の成果は、前例のない寄付モデルを学生の手でゼロから構築し、社会的な信頼を得てきたことである。法律や慣習の壁を乗り越え、企業、病院、多くの市民を巻き込む新たな価値の循環を生み出したことは、大きな自信となっている。一方で、私たちの活動がアパレル業界全体の廃棄量に与えるインパクトは、依然として限定的であるという厳しい現実も直視している。また、東西2拠点での組織運営は、法人化こそできたものの意思決定やメンバーのモチベーション維持において常に課題を抱えている。これらの課題を克服し、活動を次のステージに進めるためには、より強固な組織基盤と、現状の寄付モデルに留まらない新たな戦略が不可欠である。

今後の展望として、私達はアパレル廃棄問題に対し、より大きなインパクトを与えるための新たなアクションプランを構想している。具体的には、アパレル産業による環境負荷をオフセットする「カーボンクレジット」の仕組みの活用や、衣類を加工し元の素材に戻した上で新たな製品として再生させる「マテリアルリサイクル」への挑戦である。これらの制度や技術は既存しているものの、未だアパレル業界への適応は少ない。私達はこれらの制度や技術から新たな価値を創造し、学術機関や専門家との連携をさらに深めることで、実現可能性を追求していく。

最後に私達はこれらの活動と並行して、「教育」の重要性を強く訴えたい。特に、流行に敏感でファッションへの関心が高い大学生は、衣類を大量に消費するボリュームゾーンであると同時に、今後の社会を担う重要な存在である。だからこそ、私達大学生自身が主体となり、この問題を学び、啓発していくことに大きな意義がある。私達が学内で行っている活動を通じ、まずは身近な仲間たちにアパレル廃棄の現状を知ってもらい、自らの消費行動を見直すきっかけを提供したい。一人の意識の変化が、やがて社会全体の潮流を変える力になると信じている。非営利で民間組織である NPO 法人だからこそ、個人の善意を超え、広く市民を巻き込みながら社会を変革していく大きな原動力ある。学生ならではの既成概念にとらわれない発想力と行動力を武器に、今後もアパレル廃棄問題の解決、ひいては持続可能な社会の実現に向け、私達一人ひとりが考動し実践していく所存である。